SHOW-HEYシネマルーム

★★★

荒野にて

2017年／イギリス映画
配給：ギャガ／122分

2019（平成31）年4月20日鑑賞	シネ・リーブル梅田

Data
監督：アンドリュー・ヘイ
原作：ウィリー・ヴローティン
出演：チャーリー・プラマー／スティーヴ・ブシェミ／クロエ・セヴィニー／トラビス・フィメル／スティーブ・ザーン

■□■ショートコメント■□■

◆本作は、キネマ旬報４月下旬号の「ＲＥＶＩＥＷ　日本映画&外国映画」で３人の評論家のうち、１人が星５つ、２人が星４つをつけて絶賛している。また、私は観ていない（観る気がしなかった）が、アンドリュー・ヘイ監督の前作『さざなみ』も高評価だ。

さらに、『ゲティ家の身代金』(17年)(『シネマ42』172頁）の孫役で注目を集めた俳優チャーリー・プラマーは全編出ずっぱりの本作で、第７４回ヴェネチア国際映画祭で新人俳優賞となるマルチェロ・マストロヤンニ賞を受賞しているから、本作は必見！そう思って鑑賞したが、残念ながら、私には期待外れ。

◆導入部では、母親に捨てられながらも父親レイ（トラヴィス・フィメル）と２人で暮らす１６歳の少年チャーリー・トンプソン（チャーリー・プラマー）の姿が描かれる。父親は息子を愛してはいるものの、どうも女性関係にはだらしなさそう（？）だから、子供にはあまりいい環境とはいえない。そんな中、ある日、近くの競馬場の厩舎のオーナーであるデル（スティーヴ・ブシェミ）や、女性騎手のボニー（クロエ・セヴィニー）と知り合い、競走馬ピートの世話をしているうちに、少しずつ彼らとの交流が深まることに。ところが、父親が「女房と寝たろ！」と怒鳴り込んできた大男によって瀕死の重傷を負い、死亡してしまうと・・・。また、老いて競走馬として役に立たなくなったピートを売り払うことになると・・・。

◆さあ、そこからのチャーリーの行動は、「まだ１６歳だから仕方ない」と思う面と、「おいおい、もう１６歳なんだから、もう少ししっかりしろよ」と思う面の両方がある。「競走馬はペットじゃない」というボニーの言葉を理解できないはずはないと思うのだが、チャ

ーリーは今や唯一の心を許せる存在となったピートを連れて（盗んで）一人で厩舎を出て行ったが、その目指す先は？おカネは？当ては？
　パンフレットは本作のストーリーについて、「天涯孤独な少年と、走れなくなった競走馬。彼らは居場所を求め、希望と絶望の境を進んでいく。それは人生という名の長い旅路ー。」と書いているが、そりゃちょっとキレイ事すぎるし、甘すぎるのでは・・・？

　◆旅の途中、未成年のチャーリーはいろいろな人と出会い、いろいろな援助も受けるが、チャーリーが目指すのはワイオミングに住んでいる（はずの）マージー伯母さん（アリソン・エリオット）。もっとも、彼女はチャーリーが１２歳の時に父親と大ゲンカして以来、音信不通になっていたから、たどり着けたとしても、その先は・・・？カネがないなら、旅をしながらバイトの口を探してゆっくりと・・・。そうせざるを得ないはずだが、スクリーン上のチャーリーは一目散にワイオミングを目指していく。これでは、ピートを連れた長旅はちょっと無理・・・？そう思っていると、案の定・・・。

　◆本作のカメラは、時系列に沿ってチャーリーの動きを追っていく。狭い日本と違ってアメリカは広い。そして、その荒野は美しい。しかし、同時に自然は厳しいものだ。また、優しい人間はたくさんいるが、両親（保護者）のいない未成年の一人旅だとわかると、警察が保護施設に入れることを考えるのは当然。そんな中、チャーリーがすぐにバレてしまうような無銭飲食で店のオーナーに捕まってしまうのはいただけないが、さあチャーリーはどんな旅を？意外に単純な結末になったことも含めて、本作は私にはイマイチ・・・。

２０１９（平成３１）年4月２４日記